

FD 実施委員会主催

カリキュラムプランニングのためのワークショップ

実施日：2013年8月21日（水）・22日（木）・23日（金）

場所：東京薬科大学 教育5号館



2013 FD-WS 報告書

目次

・スケジュール	… 1
・参加者名簿	… 2
・目標趣旨	… 3~4
・ワークショップの様子	… 5~8
・アンケート結果	… 9
・終わりに	… 10

第3回 東京薬科大学 カリキュラムプランニングのためのワークショップ スケジュール

会場 東京薬科大学 教育5号館, 図書館

TEL 042-676-5111

P:全体会議(36名)、S:グループディスカッション(9名)

第1日:平成25年8月21日(水曜日)9:00~20:30

9:00 -		P	受講者集合	
9:05 -	20分	P	開会式	横松
9:25 -	5分	P	総合プレアンケート	横松
9:30 -	20分	P	オリエンテーション、ワークショップとは	大野
9:50 -	10分	P	自己紹介、情報の収集と整理、KJ法とは	横山
10:00 -	90分	S	SGD: 問題点の抽出と整理	
11:30 -	40分	P	発表、合同討議	
12:10 -	50分		マグノリア 昼食	
13:00 -	25分	P	カリキュラムとは・学習目標とは	大野
13:30 -	90分	S	SGD 学習目標の作成	
15:00 -	50分	P	発表と討議	
15:50 -	20分		コーヒーブレイク	
16:10 -	20分	P	学習方略とは	松下
16:30 -	90分	S	SGD: 学習方略の作成	
18:00 -	60分	P	発表と討議	
19:00 -	10分	P	第1日の評価	藤原
19:15 -	90分		情報交換会	下枝

第2日:平成25年8月22日(木曜日)9:00~18:30

9:00 -		P	集合	
9:05 -	5分	P	第1日の評価	藤原
9:10 -	30分	P	教育評価とは	宮岡
9:40 -	90分	S	SGD: 教育評価法の作成	
11:10 -	70分	P	発表と討議	
12:20 -	10分	P	補足説明ならびにポストアンケート	
12:30 -	10分	S	修正点の加筆	
12:40 -	50分		昼食	
13:30 -	10分	P	教育評価アンケート結果発表	森本
13:40 -	10分	P	良い試験問題を作るには	大野
13:50 -	60分	S	SGD: 良い試験問題を作るには	
14:50 -	50分	P	発表と討議(45)/問題点への対応の作業説明(5)	大野/成井
15:40 -	20分		コーヒーブレイク	
16:00 -	60分	S	SGD 問題点への対応の作成	
17:00 -	50分	P	発表、合同討議	成井
17:50 -	10分	P	補足説明: 問題解決のプロセス	
18:00 -	10分	P	第2日の評価・総合ポストアンケートの実施	浅野
18:10			閉会式	
18:40 -	()	P	第2日の評価・総合プレ・ポストアンケートの発表	浅野
19:00 -	()	P	学長からの閉会の辞	大野

2013FD-WS 参加者名簿

	氏名	役職	教室名
ディレクター	笹津 備規	学長	
ディレクター	山岸 明彦	委員長	極限環境生物学
タスクフォース	大野 尚仁	教授	免疫学
タスクフォース	横松 力	教授	分子機能解析学
タスクフォース	宮岡 宏明	准教授	生物分子有機化学
タスクフォース	横山 晴子	講師	臨床薬効解析学
タスクフォース	成井 浩二	助教	一般用医薬品学
タスクフォース	下枝 貞彦	准教授	臨床薬剤学
タスクフォース	浅野 謙一	准教授	免疫制御学
タスクフォース	藤原 祥子	准教授	環境応答植物学
タスクフォース	松下 暢子	准教授	分子生化学
タスクフォース	森本 高子	准教授	脳神経機能学
I-A	三浦 剛	教授	薬化学
I-A	高島 由季	准教授	製剤設計学
I-A	山田 純司	准教授	総合医療薬学講座
I-A	横川 彰朋	助教	臨床薬学
I-A	深見 希代子	教授	ゲノム病態医科学
I-A	梅村 知也	教授	生命分析化学
I-A	阿部 秀樹	准教授	生物有機化学
I-A	横堀 伸一	講師	極限環境生物学
I-B	高木 教夫	教授	応用生化学
I-B	竹内 裕紀	准教授	医療実務薬学
I-B	杉山 健太郎	准教授	臨床薬理学
I-B	今田 啓介	助教	生化学・分子生物学
I-B	渡邊 一哉	教授	生命エネルギー工学
I-B	内田 達也	准教授	生命分析化学
I-B	時下 進一	講師	応用微生物学
I-B	米田 敦子	助教	ゲノム病態医科学
I-C	内手 昇	講師	薬学基礎実習教育センター
I-C	吉川 大和	准教授	病態生化学
I-C	袴田 秀樹	准教授	分析化学
I-C	佐藤 弘人	助教	薬学基礎実習教育センター
I-C	山田 哲也	助手	中国医学研究室
I-C	宮川 博義	教授	脳神経機能学
I-C	田中 正人	教授	免疫制御学
I-C	井上 弘樹	講師	分子細胞生物学
I-D	安藤 堅	講師	衛生化学
I-D	林 明子	講師	機能形態学
I-D	長谷川 弘	講師	病態生理学
I-D	松本 隆司	准教授	有機合成化学
I-D	都筑 幹夫	教授	環境応答植物学
I-D	柳 茂	教授	分子生化学
I-D	伊藤 久央	教授	生物有機化学

ワークショップの趣旨

教育とは「教師が事実であると信じていることを学習者に話し伝えること」と考えられてはいないでしょうか。大学の学部専門課程の先生方のほとんどは、小・中学校の先生のような教職課程をとらずに教壇に立っているのが実状です。実習の指導教員が学生の薬剤についての知識のなさに驚き、「一体学生は授業で何を習ってきたのか」と研究室で嘆けば、講義を担当した先生からは「そんなこと十分話してあるのに、学生は全くしようがない。」と答が返ってきます。知識は伝えてあるのですが、学生が理解したかどうかの評価は、定期の試験に合格したかどうかのみでなされ、学生自身にはフィードバックされていないのです。

このワークショップでは、教育を「学習者の行動（知識・技能・態度）に価値ある変化をもたらすこと」と捉えています。学習者の到達すべき目標を設定し、教える側全員がこの目標を理解した上で、教育の方法、評価法を具体的に作りあげ、学習者が目標に到達したか、この教育の方法そのものが妥当であるかなどを評価し、より良いカリキュラムを作りあげていく手法を体得することが必要です。そしてそれがこのワークショップの目的なのです。

テーマと目標

テーマ： カリキュラム・プランニング

一般目標（GIO）：

薬学教育の改善を推進するために、教育への関心を深め、望ましいカリキュラム立案能力を修得する。

行動目標（SBO）：

1. 教育の原理・あり方を説明できる。
2. カリキュラム立案の手順を説明できる。
3. 学習単位の具体例について目標を作成できる。
4. 教育の方法、媒体の特徴を述べることができる。
5. 効果的な学習方略を立案できる。
6. 教育評価の原則、評価方法の特性を説明できる。
7. 適切な評価方法を作成できる。
8. 立案したカリキュラムを評価できる。
9. 教育改善に対する抵抗の克服手段を説明できる。
10. 教育とその改善に積極的な態度を示す。

ワークショップの様子

1日目



開会式



プレアンケート



自己紹介



KJ法



発表・合同討論



カリキュラムとは・学習目標とは

SGD 学習目標の作成



SGD 学習方略の作成

発表

2 日 目



第 1 日 の 評 価



SGD 教 育 評 価 法 の 作 成



発 表



教 育 評 価 アン ケ ー ト 結 果 発 表



SGD 良 い 試 験 問 題 を 作 る に は



SGD 問 題 点 へ の 対 応 の 作 成



SGD 問題点への対応の作成



SGD 問題点への対応の作成



閉会式 感想



閉会の辞

3 日目



山形大学 小田先生講演会

アンケート集計結果

第一日ならびに第二日目の評価

	1日目	2日目
今日のワークショップの流れにスムーズに入り込めましたか。	3.7	4.0
今日、あなたは討議にどの程度参加しましたか。	3.6	3.9
今日の内容は、あなたのニーズにマッチしましたか。	3.5	3.8
今日の世話人の仕事はよかったですか。	4.5	4.8

総合プレポストアンケート

総合アンケート

プレ	ポスト		賛成 どちらとも いえない	反対
21	27	1. カリキュラムとは、学科別時間配分表のことである。	_____	○
19	18	2. 教育目標は、教授者が何をなすべきかを明確に規定したものである。	_____	○
22	18	3. 学則で教育理念が示されていれば、教育の不十分な部分を容易に発見できる。	_____	○
22	27	4. 教育目標を設定しておかなくても、正しい評価は可能である。	_____	○
25	23	5. 知識を獲得するには、講義を聴くのが最良の方法である。	_____	○
15	23	6. 問題解決の教育には、指導者が問題解決の仕方を示さなくては学習者が問題解決能力を修得することはできない。	_____	○
8	14	7. 実習に先立って、十分に知識を教えることは必須である。	_____	○
29	25	8. 教授者が厳しければ厳しいほど、学習者はやる気を出す。	_____	○
13	21	9. 試験をしなくても、教育評価は可能である。	○	_____
4	23	10. 教育の改善を促進させるには、まず改善にとってのプラス因子を増やす方が肝要である。	_____	○

『終わりに』

FD 実施委員会 委員長
山岸 明彦

本ワークショップ（WS）は FD 実施委員会が主催して毎年開催されており、今回で第 3 回目となる。WS は幾つかの目的をもって開催されている。

その第 1 は薬学部と生命科学部の普段あまり顔をあわせることの無い教員が、2 日間の共同作業を通じて相互理解を深める事にある。薬学部が実学的側面を強く持つのに対し、生命科学部は基礎学問的側面を強く持っている。WS では両学部の教員が共同で少人数グループ討議を実践する中で、両学部の相違点を理解すると同時に、共通する悩みを共有する場になっている。この点は、多数の参加者から WS の成果であるとして高く評価されている。

第二の目標は、WS の名称にあるように「カリキュラムプランニング」に関して大学教員が学ぶことにある。大学教員は教育学を学んでいない場合が多い。また、大学教員が大学教育を受けた当時からの、成人教育に関わる発展は少なくない。成人教育の理論と、それに基づくカリキュラムプランニングの基礎的知識および実習を行うことが、本 WS の趣旨である。今日の大学教育においては、教育実践に対する自己評価とその適時の改善が求められている。新しい教育概念と教育技術の知識は、多くの参加者にその習熟は容易ではないものの教育実践に有効な知識であると肯定的に受け取られている。

第三の目的は、教員が小人数グループ討議を体験することにある。小人数討議の有効な実践のためには参加者の資質と能力が求められている。教員が小人数グループ討議を実践するなかで、教員の資質を高めるという FD の本質的な内容を持つ目的でもある。さらに、これは成人教育として有効なこの方法を学生に実施する為にも有用な経験となっている。

最後に、本 WS で取り上げた、1. 基礎学力の醸成、2. 国際化に対応できる学生の育成、3. コミュニケーション能力を高める、4. 自ら学ぶ力を身に付けるという課題は、教員が常に重要と考えている課題である。短時間ではあるが、その検討を行ったという点の意義も大きい。

こうした、目的の多くを達成した影には実施にあたった大野教授をはじめとしたスタッフと学務課事務職員の努力の成果が大きい。この場を借りて FD 実施委員会を代表して心から感謝の意を表す。